



TITLE:

# 幾何学的Association Schemeとその部分要因配置計画への応用について (実験計画法研究会報告集)

AUTHOR(S):

藤井, 淑夫

---

CITATION:

藤井, 淑夫. 幾何学的Association Schemeとその部分要因配置計画への応用について (実験計画法研究会報告集). 数理解析研究所講究録 1967, 25: 165-191

ISSUE DATE:

1967-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/107498>

RIGHT:

# 幾何学的 Association scheme とその部分要因

## 配置計画への応用について

金沢大 理 藤井 淑夫

### §1. 序論および記号

要因配置計画における一部実施法(部分要因配置計画)における分散分析等については多くの研究がある(例えば Box and Hunter 参照[1]).

しかし現在まで association schemes および association algebra 等の代数的な観点からはほとんど考察されていない. ここではその手はじめとして, 新しい型の association schemes 等を定義し, この立場から系統的に部分要因配置計画をみようと考えた. これらの association schemes および対応する association algebras の構造を明らかにし, 部分要因配置計画における別名(alikes)関係, block 擬要因, および block 配置計画における部分混同(partial confounding)等について述べる.

この小論を通じて必要な記号を述べる.

$I_n$ :  $n \times n$  の単位行列.

$G_n$ : すべての要素が1である  $n \times n$  行列.

$A \otimes B$ : 行列  $A = \|a_{ij}\|$  と  $B$  の Kronecker 積, すなわち  $A \otimes B = \|a_{ij} B\|$ .

$[A_i; i=1, \dots, m]$ : 行列  $A_i; i=1, \dots, m$  の linear closure によって生成される実数体上のベクトル空間.

$\{A_i; i=1, \dots, m\}$ : 行列  $A_i; i=1, \dots, m$  を生成元とする実数体上の多

元環 (algebra).

$\{A_i; i=1, \dots, m\}$  :  $A_i; i=1, \dots, m$  を要素とする集合.

$GF(\delta)$  :  $\delta = 2^u$  個の元からなる有限体.  $\delta$  は素数,  $u$  は正整数とする.

また  $GF(\delta)$  の元  $a$  は座標表現 (多項式表現) として,  $a = \langle a^{(1)}, \dots, a^{(u)} \rangle$

,  $a^{(i)} \in GF(\delta)$ ,  $i=1, \dots, u$  で表わすことにする.

$EG(k, \delta)$  :  $GF(\delta)$  上の  $k$  次元 Euclid 空間.

$PG(k, \delta)$  :  $GF(\delta)$  上の  $k$  次元射影空間.

$\mathcal{P}(A)$  :  $GF(\delta)$  上の行列  $A (k \times p)$  ( $\neq 0$ ) の  $p$  個の列ベクトルの生成する

$PG(k-1, \delta)$  の部分空間.

$\overline{PG}(k, \delta)$  :  $PG(k, \delta)$  に零ベクトル  $0 (\in EG(k+1, \delta))$  を添加して生ずる

空間. すなわち,  $\overline{PG}(k, \delta) = PG(k, \delta) \cup \{0\}$ .

$\overline{\mathcal{P}}(A)$  :  $\overline{\mathcal{P}}(A) = \mathcal{P}(A) \cup \{0\}$ .

$\mathcal{P} \cup \mathcal{Q}$  :  $PG(k, \delta)$  の部分空間  $\mathcal{P}, \mathcal{Q}$  を同時に含む最小の部分空間.

$\mathcal{P} \cap \mathcal{Q}$  :  $PG(k, \delta)$  の部分空間  $\mathcal{P}, \mathcal{Q}$  に同時に含まれる最大の部分空間.

$\underline{a} = (a_1, \dots, a_k)'$  :  $EG(k, \delta)$  上の点. 座標成分はラテン文字で表わす.

$\underline{\alpha} = (\alpha_1, \dots, \alpha_k)'$  :  $PG(k-1, \delta)$  上の点. 座標成分はギリシャ文字で表わす.

1. 代表のものを固定する. また  $GF(\delta)$  の座標表現を用いて, 例えば

$EG(k, \delta)$  上の点  $\underline{a}$  は  $\underline{a} = (a_1, \dots, a_k)$ ,  $a_i = \langle a_i^{(1)}, \dots, a_i^{(u)} \rangle$ ,

$a_i^{(\ell)} \in GF(\delta)$ ,  $i=1, \dots, k$ ,  $\ell=1, \dots, u$  で表わされる.

## §2. $PG(k-1, \delta)$ -association scheme

点  $\underline{a}$  ( $\in EG(k, \delta)$ ) を標識とする  $v_k = \delta^k$  個の treatments  $\phi(\underline{a}) = \phi(a_1, \dots, a_k)$

を考え、これらの  $v_k$  個の *treatments* の間に次の関係を導入する。

$EG(k, \Delta)$  上の任意の 2 点  $a, b$  に対し:

$$(2.1) \quad a - b = p\alpha; \quad p \in GF(\Delta), \quad p \neq 0, \quad \alpha \in PG(k-1, \Delta)$$

のとき、*treatments*  $\phi(a)$  と  $\phi(b)$  は  $\alpha$ -th associate の関係にあるとい

$$\phi(a) \xrightarrow{\alpha\text{-th}} \phi(b)$$

で表わす。便宜上、任意の *treatment* はそれ自身の  $0$ -th associate ( $0' = (0, \dots, 0)$ ) であるとする。

$v_k$  個の元の間に導入された *treatments* の間のこの関係は *association scheme* (例えば [2] 参照) のみたすべき条件 (a), (b), (c) を同時に満足することが示される。すなわち

(a) 任意の相異なる 2 つの *treatments* は、いずれかの  $\alpha (\in PG(k-1, \Delta))$ -th associate であつて、それに限る。且つ *association* の関係は対称的である。またすべての *treatment* はそれ自身の  $0$ -th associate である。

このことは定義より明らかである。

(b) 任意に固定した *treatment*  $\phi(a)$  と  $\alpha$ -th associates である *treatments*  $\phi(b)$  の個数  $n_\alpha$  は始めに固定した *treatment*  $\phi(a)$  の選び方に無関係は一定値である。

このことは  $\phi(a)$  を固定したとき、(2.1) 式をみたす解  $b$  の個数は、 $GF(\Delta) \ni p (\neq 0)$  のとり方が  $\Delta-1$  通りであるから

$$(2.2) \quad n_\alpha = \Delta - 1; \quad \alpha \in PG(k-1, \Delta)$$

である。特に  $n_0 = 1$  である。すなわち (b) が成立する。

(C) 任意に固定した2つの treatments  $\phi(\alpha)$  と  $\phi(\beta)$  とが  $\alpha$ -th associate であるとする。このとき  $\phi(\alpha)$  と  $\beta$ -th associates であり、同時に  $\phi(\beta)$  と  $\gamma$ -th associates である treatments  $\phi(\gamma)$  の個数  $p_{\beta\gamma}^{\alpha}$  は最初に固定した treatments pair に無関係である。

このことは  $\phi(\alpha)$ ,  $\phi(\beta)$  を固定したとき

$$(2.3) \quad \begin{cases} \alpha - \beta = p_{\alpha} \\ \gamma - \alpha = p_{\beta} \\ \gamma - \beta = p_{\gamma} \end{cases}$$

を同時に満足する解  $\gamma$  の個数が  $p_{\beta\gamma}^{\alpha}$  であるが、容易に  $\alpha, \beta, \gamma \in PG(k-1, \Delta)$  のとき

$$(2.4) \quad p_{\beta\gamma}^{\alpha} = \begin{cases} 1 & ; \beta \neq \gamma \text{ で } \alpha, \beta, \gamma \text{ が共線, 且つ } \alpha \neq \beta, \gamma \text{ のとき} \\ \Delta-2 & ; \alpha = \beta = \gamma \text{ のとき} \\ 0 & ; \text{otherwise} \end{cases}$$

であることが示される。また特に  $\alpha, \beta, \gamma$  のうちいずれかが 0 である場合は

$$(2.5) \quad p_{\beta\gamma}^0 = \begin{cases} \Delta-1 & ; \beta = \gamma \neq 0 \text{ のとき} \\ 1 & ; \beta = \gamma = 0 \text{ のとき} \\ 0 & ; \text{otherwise} \end{cases}$$

$$(2.6) \quad p_{\alpha\gamma}^0 = \begin{cases} 1 & ; \alpha = \gamma \text{ のとき} \\ 0 & ; \text{otherwise} \end{cases}$$

である。したがって  $\alpha$ -th associate である treatments  $\phi(\alpha)$ ,  $\phi(\beta)$  のとり方

に無関係に  $P_{\beta\beta}^2$  は一定であるから, (c) が成立することかわかる.

以上のことより  $v_k$  個の treatments  $\phi(\alpha)$ ,  $\alpha \in \text{EG}(k, \lambda)$  の間に  $m = \frac{\lambda-1}{\lambda-1}$  (

$\text{PG}(k-1, \lambda)$  上の点の総数) *associate classes* の *association scheme* が導入されたが, これを我々は  $\text{PG}(k-1, \lambda)$ -association scheme ということにする.

特に  $k=2$  の場合は, 大きさ  $\lambda$  の互に直交する適当な  $\lambda-1$  個のラテンオ格によつて構成される  $r = \lambda+1$  の場合の  $\text{OL}_r$ -association scheme ( $m = \lambda+1$  *associate classes*) [6] になる.

このように定義された *association scheme* の行列表現とみなされる *association matrices* は treatments  $\phi(\alpha)$  に適当に番号をつけて, 次の様に定義する. すなわち

$$(2.7) \quad A_{\alpha} = \| a_{\alpha\beta}^{\frac{\lambda}{2}} \|$$

ここに

$$a_{\alpha\beta}^{\frac{\lambda}{2}} = \begin{cases} 1 & ; \quad \phi(\alpha) \xrightarrow{\alpha\text{-th}} \phi(\beta) \text{ のとき} \\ 0 & ; \quad \text{otherwise} \end{cases}$$

とする. 特に  $A_0 = I_{v_k}$  である.

また treatments  $\phi(\alpha)$  に辞引的に番号をつけることにより,  $\lambda \times \lambda$  の *permutation matrix*

$$(2.8) \quad P = \left\| \begin{array}{cccc} 0 & & & 1 \\ 1 & 0 & & \\ & & \ddots & \\ & & & 1 \\ & & & & 0 \end{array} \right\|$$

を用いて,  $A_{\alpha}$ ;  $\alpha \in \text{PG}(k-1, \lambda)$  は次の様に表わすことが出来る.

$$(2.9) \quad A_{\alpha} = \sum_{\beta \in \text{GF}(\lambda), \beta \neq 0} P^{\beta\alpha}$$

ここに

$$P^{\rho\alpha} = \prod_{i=1}^k \otimes P^{\rho\alpha_i}, \quad P^{\rho\alpha_i} = \prod_{l=1}^u \otimes P^{\gamma_i^{(l)}}, \quad \rho\alpha_i = \langle \gamma_i^{(1)}, \dots, \gamma_i^{(u)} \rangle$$

$$\gamma_i^{(l)} \in GF(8), \quad i=1, \dots, k, \quad l=1, \dots, u.$$

である.

定義から  $A_{\alpha}$ ;  $\alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)$  はすべて対称行列であって

$$(2.10) \quad \begin{cases} \sum_{\alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)} A_{\alpha} = G_{v_k} \\ A_{\alpha} A_{\beta} = A_{\beta} A_{\alpha} = \sum_{\gamma \in \overline{PG}(k-1, \Delta)} p_{\alpha\beta}^{\gamma} A_{\gamma} \end{cases}$$

が成立する. 特に (2.4), (2.5), (2.6) 式から (2.10) 式は

$$(2.11) \quad \begin{cases} A_0 A_{\alpha} = A_{\alpha} A_0 = A_{\alpha} & ; \alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta) \text{ のとき} \\ A_{\alpha}^2 = (\Delta-1) A_0 + (\Delta-2) A_{\alpha} & ; \alpha \in PG(k-1, \Delta) \text{ のとき} \\ A_{\alpha} A_{\beta} = A_{\beta} A_{\alpha} = \sum_{\substack{\gamma \in \overline{PG}(k-1, \Delta) \\ \gamma \neq \alpha, \beta}} A_{\gamma} & ; \alpha \neq \beta, \text{ 且つ } \alpha, \beta \in PG(k-1, \Delta) \text{ のとき} \end{cases}$$

である. ここに  $\gamma \in \overline{\alpha, \beta}$  は  $\alpha, \beta, \gamma$  が  $PG(k-1, \Delta)$  上で共線であることを意味する. また (2.11) 式から

$$(2.11') \quad \begin{cases} (A_0 + A_{\alpha})^2 = \Delta(A_0 + A_{\alpha}) & ; \alpha \in PG(k-1, \Delta) \text{ のとき} \\ (A_0 + A_{\alpha})(A_0 + A_{\beta}) = A_0 + \sum_{\gamma \in \overline{\alpha, \beta}} A_{\gamma} & ; \alpha \neq \beta, \text{ 且つ } \alpha, \beta \in PG(k-1, \Delta) \text{ のとき} \end{cases}$$

が成立する.

$A_{\alpha}$ ;  $\alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)$  を生成元とする実数体上のベクトル空間

$[A_\alpha; \alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)]$  は (2.11) 式によって実数体上の可換な (linear associative) algebra をつくる. これを

$$\mathcal{O}(PG(k-1, \Delta)) = [A_\alpha; \alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)]$$

と書くことにする. この algebra  $\mathcal{O}(PG(k-1, \Delta))$  を  $PG(k-1, \Delta)$ -association algebra とよぶことにする. 対称行列から生成される algebra は *completely reducible* であり, 代数的閉体上の可換な algebra の既約表現は 1 次であるから,  $\mathcal{O}(PG(k-1, \Delta))$  は順序を度外視して  $\frac{\Delta^k - 1}{\Delta - 1} + 1$  個の既約な両側 ideals の直和として一意的に書き表わされる [2]. これらの ideals の principal idempotents を  $A_\alpha^\#$  ( $\alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)$ , 特に  $A_0^\# = \frac{1}{\Delta^k} G_{\Delta^k}$  とすることが出来る) とすると,  $\mathcal{O}(PG(k-1, \Delta))$  はこれらの principal idempotents  $A_\alpha^\#; \alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)$  の linear closure として

$$\mathcal{O}(PG(k-1, \Delta)) = [A_\alpha^\#; \alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)] = \sum_{\alpha \in \overline{PG}(k-1, \Delta)} \oplus [A_\alpha^\#]$$

で表わされることが知られている (例えば [5] 参照). これらの principal idempotents  $A_\alpha^\#$  を具体的に求める方法については §4. で述べる.

特に  $k=1$  のときは

$$(2.12) \quad \begin{cases} A_0 = I_\Delta, & A_1 = G_\Delta - I_\Delta \\ A_0^\# = \frac{1}{\Delta} G_\Delta, & A_1^\# = I_\Delta - \frac{1}{\Delta} G_\Delta \\ \mathcal{O}(PG(0, \Delta)) = [A_0, A_1] = [A_0^\#, A_1^\#] = [A_0^\#] \oplus [A_1^\#] \end{cases}$$

が成立する.

### §3. $\Delta^{k-p}$ - fractional factorial association scheme



$v_k = \delta^k$  個の treatments  $\phi(a)$ ,  $a \in EG(k, \delta)$  において, いま

$$(3.1) \quad F = \|f_{ij}\| \quad (p \times k) \quad p < k$$

を rank が  $p$  の  $GF(\delta)$  上の行列とすると, 関係式

$$(3.2) \quad Fx = f, \quad x = (x_1, \dots, x_k)' \in EG(k, \delta), \quad f = (f_1, \dots, f_p)' \in EG(p, \delta)$$

をみたす  $\delta^{k-p}$  個の解  $x \in EG(k, \delta)$  の張る  $k-p$  次元の超平面:

$$(3.3) \quad \mathcal{F}_f^{k-p} = \{x \mid Fx = f, x \in EG(k, \delta)\}$$

を考える.

$\mathcal{F}_f^{k-p} \ni x$  に対応する treatments  $\phi(x)$  のみを実施するものとする. 実施した treatments  $\phi(x)$ ,  $x \in \mathcal{F}_f^{k-p}$  の間の関係を  $PG(k-1, \delta)$ -association scheme によつて induce される関係によつて定義する. すなわち  $\mathcal{F}_f^{k-p} \ni x, y$  に対応する 2 つの treatments  $\phi(x), \phi(y)$  が  $EG(k, \delta)$  上で  $x - y = p\alpha$ ,  $p \neq 0$  のとき,  $\alpha$ -th associate であるといい,  $\mathcal{F}_f^{k-p} \ni x$  に対応する treatment  $\phi(x)$  はそれ自身の  $0$ -th associate であると定義する. この関係が association scheme の公理をみたすことが次の様にしてわかる.

$\mathcal{F}_f^{k-p} \ni x, y$  に対応する treatments  $\phi(x), \phi(y)$  が  $EG(k, \delta)$  上で

$$\phi(x) \xrightarrow{\alpha\text{-th}} \phi(y)$$

であるとき, 勿論  $Fx = f$ ,  $Fy = f$  であるから, したがつて  $F(x - y) = 0$  である. 故に association の関係を標示する  $\alpha = (\alpha_1, \dots, \alpha_k)'$  は  $F\alpha = 0$  をみたすもの全体である. すなわち, この  $\alpha (\neq 0)$  の全体は  $PG(k-1, \delta)$  における  $k-1-p$  次元超平面を形成する. この超平面を

$$\mathcal{P}^{k-1-p} = \{\alpha \mid F\alpha = 0, \alpha \in PG(k-1, \delta)\}$$

で表わす. また  $\overline{\mathcal{P}}^{k-1-p} = \mathcal{P}^{k-1-p} \cup \{0\}$  とする.

これらの treatments  $\phi(x)$  ( $x \in \mathcal{F}_f^{k-p}$ ) の間の関係は

(a) 任意の相異なる 2 つの treatments  $\phi(x), \phi(y)$  はいずれかの  $\alpha$ -th ( $\alpha \in \mathcal{P}^{k-1-p}$ ) associate であって, それに限る. また association の関係は対称的である. 特に  $\phi(x)$  はそれ自身の  $0$ -th associate である.

(b) 任意の treatment  $\phi(x)$  ( $x \in \mathcal{F}_f^{k-p}$ ) の  $\alpha$ -th associates であるものの個数  $n_\alpha$  は

$$(3.4) \quad n_\alpha = \begin{cases} \Delta-1 & ; \alpha \in \mathcal{P}^{k-1-p} \text{ のとき} \\ 1 & ; \alpha = 0 \text{ のとき} \end{cases}$$

である.

(c) 任意の 2 つの treatments  $\phi(x), \phi(y)$  が  $\alpha$ -th associate であるとする. そのとき,  $\phi(x)$  と  $\beta$ -th associates であり, 同時に  $\phi(y)$  と  $\gamma$ -th associates ( $\beta, \gamma \in \mathcal{P}^{k-1-p}$ ) である treatments  $\phi(z)$  (このとき自動的に  $z \in \mathcal{F}_f^{k-p}$  である) の個数  $p_{\beta\gamma}^\alpha$  は  $PG(k-1, \Delta)$ -association scheme の場合と同様に  $\alpha, \beta, \gamma \in \mathcal{P}^{k-1-p}$  のとき

$$(3.5) \quad p_{\beta\gamma}^\alpha = \begin{cases} 1 & ; \beta \neq \gamma, \alpha \in \overline{\beta, \gamma} \text{ 且つ } \alpha \neq \beta, \gamma \text{ のとき} \\ \Delta-2 & ; \alpha = \beta = \gamma \text{ のとき} \\ 0 & ; \text{otherwise} \end{cases}$$

が成立する. 特に  $\alpha, \beta, \gamma$  のうち  $0$  のものがあるとき

$$(3.6) \quad p_{\beta\gamma}^0 = \begin{cases} \Delta-1 & ; \beta = \gamma \in \mathcal{P}^{k-1-p} \text{ のとき} \\ 1 & ; \beta = \gamma = 0 \text{ のとき} \\ 0 & ; \text{otherwise} \end{cases}$$

$$(3.7) \quad p_{\underline{\alpha}\underline{\gamma}}^{\underline{\alpha}} = \begin{cases} 1 & ; \quad \underline{\alpha} = \underline{\gamma} \text{ のとき} \\ 0 & ; \quad \text{otherwise} \end{cases}$$

が成立する。以上のことから  $p_{\underline{\beta}\underline{\gamma}}^{\underline{\alpha}}$  は最初に選んだ treatments pair  $\phi(\underline{x}), \phi(\underline{y})$  の選が方に無関係である。

故にこの treatments  $\phi(\underline{x})$  ( $\underline{x} \in \mathcal{F}_f^{k-p}$ ) の間の association の関係は  $\frac{\lambda^{k-p}-1}{\lambda-1}$  associate classes ( $\mathcal{P}^{k-1-p}$  の点の総数) の association scheme であることがわかる。この association scheme を  $PG(k-1, \lambda)$ -association scheme によって induce された  $\lambda^{k-p}$ -fractional factorial association scheme ということにする。以上のことから次の定理を得る。

定理 I.  $EG(k, \lambda)$  のある超平面  $\underline{f} = \{ \underline{x} \mid F\underline{x} = \underline{f}, \underline{x} \in EG(k, \lambda) \}$  の元に対応する treatments  $\phi(\underline{x})$  の間に  $PG(k-1, \lambda)$ -association scheme によって induce される関係は association scheme の公理を満足する。

$\mathcal{F}_f^{k-p}$  の点に適当に番号をつけて、 $\lambda^{k-p}$ -fractional factorial association scheme の行列表現である association matrices を定義する。すなわち

$$(3.8) \quad B_{\underline{\alpha}} = \| a_{\underline{x}\underline{\alpha}}^{\underline{y}} \| ; \quad \underline{x}, \underline{y} \in \mathcal{F}_f^{k-p}, \quad \underline{\alpha} \in \overline{\mathcal{P}}^{k-1-p}$$

である。定義から  $B_{\underline{\alpha}}$  は  $v_{k-p} \times v_{k-p}$  の対称行列で、特に  $B_{\underline{0}} = I_{v_{k-p}}$  である。また明らかに次の関係式が成立する。

$$(3.9) \quad \begin{cases} \sum_{\underline{\alpha} \in \overline{\mathcal{P}}^{k-1-p}} B_{\underline{\alpha}} = G_{v_{k-p}} \\ B_{\underline{\alpha}} B_{\underline{\beta}} = B_{\underline{\beta}} B_{\underline{\alpha}} = \sum_{\underline{\gamma} \in \overline{\mathcal{P}}^{k-1-p}} p_{\underline{\alpha}\underline{\beta}}^{\underline{\gamma}} B_{\underline{\gamma}} \end{cases}$$

また、特に

$$(3.10) \quad \begin{cases} B_0 B_\alpha = B_\alpha B_0 = B_\alpha & ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p} \text{ のとき} \\ B_\alpha^2 = (\delta-1) B_0 + (\delta-2) B_\alpha & ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p} \text{ のとき} \\ B_\alpha B_\beta = B_\beta B_\alpha = \sum_{\substack{\gamma \in \overline{\alpha, \beta} \\ \gamma \neq \alpha, \beta}} B_\gamma & ; \alpha \neq \beta, \alpha, \beta \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p} \text{ のとき} \end{cases}$$

である。また (3.10) 式から

$$(3.10') \quad \begin{cases} (B_0 + B_\alpha)^2 = \delta (B_0 + B_\alpha) & ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p} \text{ のとき} \\ (B_0 + B_\alpha)(B_0 + B_\beta) = B_0 + \sum_{\gamma \in \overline{\alpha, \beta}} B_\gamma & ; \alpha, \beta \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p}, \alpha \neq \beta \text{ のとき} \end{cases}$$

が成立する。  $B_\alpha$  ;  $\alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p}$  を生成元とする実数体上のベクトル空間は (3.10) 式によって実数体上の可換な algebra をつくる。これを

$$\mathcal{O}(\delta^{k-p} - F_r) = [B_\alpha ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p}]$$

で表わし,  $\delta^{k-p}$  - fractional factorial association algebra ということにする。  $\mathcal{O}(\delta^{k-p} - F_r)$  の  $\frac{\delta^{k-p}-1}{\delta-1} + 1$  個の既約な両側 ideals の principal idempotents を  $B_\alpha^\#$  (特に  $B_0^\# = \frac{1}{v_{k-p}} G_{v_{k-p}}$  とすることができ) で表わす。これらの principal idempotents  $B_\alpha^\#$  を具体的に求める方法については §4. で述べる。

#### §4. $\mathcal{O}(\text{PG}(k-1, \delta))$ および $\mathcal{O}(\delta^{k-p} - F_r)$ の互に直交する idempotents

§3. で定義した  $p \times k$  行列  $F$  の  $p$  個の行ベクトルに一次独立な  $k-p$  個の一次独立な行ベクトルからなる行列を  $\tilde{F}$  とする。すなわち,  $r(F'; \tilde{F}') = k$  とする。そのとき  $\mathcal{O}(\text{PG}(k-1, \delta))$  および  $\mathcal{O}(\delta^{k-p} - F_r)$  の互に直交する principal idempotents  $A_\alpha^\#$  ( $\alpha \in \overline{\text{PG}(k-1, \delta)}$ ), および  $B_\alpha^\#$  ( $\alpha \in \bar{\mathcal{P}}(\tilde{F}')$ ) を求

めるために次の Lemmas を述べる.

Lemma 1.  $\frac{1}{\delta}(A_0 + A_\alpha)$ ;  $\alpha \in PG(k-1, \delta)$  は *idempotent* であつて  $\mathcal{P}$ ,  $\mathcal{Q}$  を  $PG(k-1, \delta)$  の部分空間とするととき次の関係式が成立する.

$$(4.1) \quad \prod_{\alpha \in \mathcal{P}} \left( \frac{1}{\delta}(A_0 + A_\alpha) \right) = \frac{1}{\delta^{l+1}} \left( A_0 + \sum_{\alpha \in \mathcal{P}} A_\alpha \right)$$

$$(4.2) \quad \prod_{\alpha \in \mathcal{P}} \left( \frac{1}{\delta}(A_0 + A_\alpha) \right) \cdot \prod_{\beta \in \mathcal{Q}} \left( \frac{1}{\delta}(A_0 + A_\beta) \right) = \prod_{\alpha \in \mathcal{P} \cup \mathcal{Q}} \left( \frac{1}{\delta}(A_0 + A_\alpha) \right)$$

ここに,  $l$  は部分空間  $\mathcal{P}$  の次元数とする. 特に  $\mathcal{P} = PG(k-1, \delta)$  のときは

$$(4.3) \quad \prod_{\alpha \in PG(k-1, \delta)} \left( \frac{1}{\delta}(A_0 + A_\alpha) \right) = \frac{1}{\delta^k} (A_0 + \sum_{\alpha \in PG(k-1, \delta)} A_\alpha) = \frac{1}{\delta^k} G_{\delta^k}$$

が成立する.

証明  $\frac{1}{\delta}(A_0 + A_\alpha)$ ;  $\alpha \in PG(k-1, \delta)$  が *idempotents* であること, および (4.2) が成立することは (2.11') 式および可換性から明らかである. したがつて (4.1) 式を証明する. 部分空間  $\mathcal{P}$  の次元数についての帰納法で証明する.  $l=0$  のときは明らかに成立する.  $\mathcal{P}$  の次元数が  $l-1$  ( $l < k$ ) のとき (4.1) 式が成立したと仮定する.  $\mathcal{P}$  に 1 次独立な点  $\gamma \in PG(k-1, \delta)$  を考えれば (4.2) 式から

$$\prod_{\alpha \in \mathcal{P} \cup \{\gamma\}} \left( \frac{1}{\delta}(A_0 + A_\alpha) \right) = \prod_{\alpha \in \mathcal{P}} \left( \frac{1}{\delta}(A_0 + A_\alpha) \right) \cdot \frac{1}{\delta}(A_0 + A_\gamma)$$

が成立する. 帰納法の仮定から右辺の式は (2.11) 式を使うことにより

$$\frac{1}{\delta^l} (A_0 + \sum_{\alpha \in \mathcal{P}} A_\alpha) \cdot \frac{1}{\delta} (A_0 + A_\gamma) = \frac{1}{\delta^{l+1}} (A_0 + \sum_{\alpha \in \mathcal{P} \cup \{\gamma\}} A_\alpha)$$

が成立する。故に  $\mathcal{P}$  の次元数が  $2$  のときに (4.1) が成立する。

Lemma 2.  $PG(k-1, \delta)$  の部分空間  $\mathcal{P}, \mathcal{Q}$  について次のことがらが成立する。

- (i)  $\prod_{\alpha \in \mathcal{P}} \left( \frac{1}{\delta} (A_0 + A_\alpha) \right) - \frac{1}{\delta^k} G_{\delta^k}$  は idempotent である
- (ii)  $\prod_{\alpha \in \mathcal{P}} \left( \frac{1}{\delta} (A_0 + A_\alpha) \right) - \frac{1}{\delta^k} G_{\delta^k}$  と  $\prod_{\beta \in \mathcal{Q}} \left( \frac{1}{\delta} (A_0 + A_\beta) \right) - \frac{1}{\delta^k} G_{\delta^k}$  とが互に直交するための必要十分条件は  $\mathcal{P} \cup \mathcal{Q} = PG(k-1, \delta)$  であることである。

証明 Lemma 1. から明らかである。

次の Lemma も, Lemma 1. を用いて証明できる。

Lemma 3.  $PG(k-1, \delta)$  の  $k-2$  次元の部分空間  $\mathcal{P}$  に対して

$$A_{\mathcal{P}}^{\#} = \prod_{\alpha \in \mathcal{P}} \left( \frac{1}{\delta} (A_0 + A_\alpha) \right) - \frac{1}{\delta^k} G_{\delta^k}$$

とするとき  $[A_{\mathcal{P}}^{\#}]$  は  $\mathcal{O}(PG(k-1, \delta))$  の既約な両側 ideal であり, その principal idempotent は  $A_{\mathcal{P}}^{\#}$  である。また

$$I_{\delta^k} = A_0^{\#} + \sum_{(\mathcal{P})} A_{\mathcal{P}}^{\#} ; A_0^{\#} = \frac{1}{\delta^k} G_{\delta^k}$$

は  $\mathcal{O}(PG(k-1, \delta))$  に応ずる単位元  $I_{\delta^k}$  の互に直交する idempotents の分解を与える。ここに和  $\sum_{(\mathcal{P})}$  は  $PG(k-1, \delta)$  のすべての  $k-2$  次元部分空間  $\mathcal{P}$  についての総和を意味する。

$PG(k-1, \delta)$  の  $k-2$  次元部分空間  $\mathcal{P}$  は, 適当な点  $\alpha \in PG(k-1, \delta)$  をとって

$$\mathcal{P} = \{ \mathcal{P} \mid \mathcal{P}'\alpha = 0, \mathcal{P} \in PG(k-1, \delta) \} \equiv (\alpha)$$

で表わすことができるから, Lemma 1, 3. を用いて  $\mathcal{O}(PG(k-1, \delta))$  の互に直交する principal idempotents は

$$(4.4) \quad \left\{ \begin{aligned} A_{\alpha}^{\#} (\equiv A_{(\alpha)}^{\#}) &= \frac{1}{\Delta^{k-1}} \sum_{\substack{f' \alpha = 0 \\ f \in \overline{PG}(k-1, \Delta)}} A_f - \frac{1}{\Delta^k} G_{\Delta^k} ; \alpha \in PG(k-1, \Delta) \text{ のとき} \\ &= \frac{1}{\Delta^k} \left\{ (\Delta-1) \sum_{\substack{f' \alpha = 0 \\ f \in \overline{PG}(k-1, \Delta)}} A_f - \sum_{\substack{f' \alpha \neq 0 \\ f \in PG(k-1, \Delta)}} A_f \right\} \\ A_0^{\#} &= \frac{1}{\Delta^k} G_{\Delta^k} \end{aligned} \right.$$

で与えられる。また  $\mathcal{O}(\Delta^{k-p} - F_r)$  の場合についても Lemmas 1, 2, 3 と同様の Lemmas が成立するから、 $\mathcal{O}(\Delta^{k-p} - F_r)$  の互に直交する principal idempotents は

$$(4.5) \quad \left\{ \begin{aligned} B_{\alpha}^{\#} &= \frac{1}{\Delta^{k-1-p}} \sum_{\substack{f' \alpha = 0 \\ f \in \overline{P}^{k-1-p}}} B_f - \frac{1}{\Delta^{k-p}} G_{\Delta^{k-p}} ; \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}') \text{ のとき} \\ &= \frac{1}{\Delta^{k-p}} \left\{ (\Delta-1) \sum_{\substack{f' \alpha = 0 \\ f \in \overline{P}^{k-1-p}}} B_f - \sum_{\substack{f' \alpha \neq 0 \\ f \in \overline{P}^{k-1-p}}} B_f \right\} \\ B_0^{\#} &= \frac{1}{\Delta^{k-p}} G_{\Delta^{k-p}} \end{aligned} \right.$$

で与えられることがわかる。idempotents  $A_{\alpha}^{\#}$ ,  $B_{\alpha}^{\#}$  の rank はそれぞれ

$$(4.6) \quad r(A_{\alpha}^{\#}) = \begin{cases} \Delta - 1 & ; \alpha \in PG(k-1, \Delta) \text{ のとき} \\ 1 & ; \alpha = 0 \text{ のとき} \end{cases}$$

$$(4.7) \quad r(B_{\alpha}^{\#}) = \begin{cases} \Delta - 1 & ; \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}') \text{ のとき} \\ 1 & ; \alpha = 0 \text{ のとき} \end{cases}$$

である。また  $A_{\alpha} = \sum_{\beta \in \overline{PG}(k-1, \Delta)} z_{\beta \alpha} A_{\beta}^{\#}$ ,  $A_{\alpha}^{\#} = \sum_{\beta \in \overline{PG}(k-1, \Delta)} z^{\alpha \beta} A_{\beta}$  とすれば

$$z^{\alpha \beta} = r_{\alpha} z_{\alpha \beta} / (v_k n_{\beta}) ; r_{\alpha} = r(A_{\alpha}^{\#})$$

であるから, (4.4)式を  $A_{\alpha}$  について解けば

$$(4.8) \quad \begin{cases} A_{\alpha} = (\lambda - 1) \sum_{\substack{f' : \alpha = 0 \\ f \in \overline{PG}(k-1, \lambda)}} A_f^{\#} - \sum_{\substack{f' : \alpha \neq 0 \\ f \in PG(k-1, \lambda)}} A_f^{\#} ; \alpha \in PG(k-1, \lambda) \text{ のとき} \\ A_0 = \sum_{f \in \overline{PG}(k-1, \lambda)} A_f^{\#} \end{cases}$$

が得られる. 同様に (4.5)式を  $B_{\alpha}$  について解けば

$$(4.9) \quad \begin{cases} B_{\alpha} = (\lambda - 1) \sum_{\substack{f' : \alpha = 0 \\ f \in \overline{P}(\tilde{F})}} B_f^{\#} - \sum_{\substack{f' : \alpha \neq 0 \\ f \in P(\tilde{F})}} B_f^{\#} ; \alpha \in P^{k-1-p} \text{ のとき} \\ B_0 = \sum_{f \in \overline{P}(\tilde{F})} B_f^{\#} \end{cases}$$

が得られる.

## §5. $\mathcal{O}(PG(k-1, \lambda))$ と $\mathcal{O}(\lambda^{k-p} - F_r)$ の間の関係

$\mathcal{O}(PG(k-1, \lambda))$  および  $\mathcal{O}(\lambda^{k-p} - F_r)$  の幾何学的意味を考えて, 我々は実数体上の  $v_k$  次元 Euclid 空間から  $v_{k-p}$  次元 Euclid 空間への線型写像  $\sigma$  を与える operator 重を次の様に定義する.

$$(5.1) \quad \Phi (\equiv \Phi(F; \underline{x})) = \|\varphi_{\underline{x}\underline{a}}\| (\lambda^{k-p} \times \lambda^k), \quad \underline{x} \in \overline{F}_f^{k-p}, \quad \underline{a} \in EG(k, \lambda)$$

ここに

$$\varphi_{\underline{x}\underline{a}} = \begin{cases} 1 & ; \quad \underline{x} = \underline{a} \text{ のとき} \\ 0 & ; \quad \underline{x} \neq \underline{a} \text{ のとき} \end{cases}$$

とする.  $\Phi$  による  $\mathcal{O}(PG(k-1, \lambda))$  の線型写像:

$$\sigma: A \longrightarrow \Phi A \Phi' \quad (A \in \mathcal{O}(PG(k-1, \lambda)))$$



を考へる.  $\Phi A_{\alpha} \Phi'$  は明らかに

$$(5.2) \quad \Phi A_{\alpha} \Phi' = \begin{cases} B_{\alpha} & ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p} \text{ のとき} \\ 0 & ; \text{otherwise} \end{cases}$$

である. (4.4) 式および (4.5) 式から

$$(5.3) \quad \Phi A_{\alpha}^{\#} \Phi' = \begin{cases} \frac{1}{\Delta^p} B_{\alpha}^{\#} & ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}(\tilde{F}') \text{ のとき} \\ \frac{\Delta-1}{\Delta^p} B_0^{\#} & ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}(F') \text{ のとき} \end{cases}$$

が成立する.

係数  $\frac{1}{\Delta^p}$ ,  $\frac{\Delta-1}{\Delta^p}$  を度外視して (5.3) 式を満たす,  $\Phi$  によって定義される  $\mathcal{O}(\text{PG}(k-1, \Delta))$  の線型写像  $\sigma$  を 一部(実施)相似写像 (fractionally similar mapping) ということにする.

任意の  $\alpha \in \overline{\text{PG}}(k-1, \Delta)$  に対して

$$\alpha = \xi \alpha_1 + \alpha_2 \quad (\alpha_1 \in \bar{\mathcal{P}}(\tilde{F}'), \alpha_2 \in \bar{\mathcal{P}}(F'), \xi \in GF(\Delta))$$

として一意的に書き表わされるから, 簡単な計算で,  $\alpha \neq 0$  のとき

$$(5.4) \quad \Phi A_{\alpha}^{\#} \Phi' = \begin{cases} \frac{1}{\Delta^p} B_{\alpha_1}^{\#} & ; \xi \neq 0 \text{ のとき} \\ \frac{\Delta-1}{\Delta^p} B_0^{\#} & ; \xi = 0 \text{ のとき} \end{cases}, \quad \alpha = \xi \alpha_1 + \alpha_2$$

であることがわかる. 以上のことより線型写像  $\tau$ :

$$(5.5) \quad \tau(A_{\alpha}^{\#}) = \begin{cases} \frac{\Delta^p}{\Delta-1} \sigma(A_{\alpha}^{\#}) & ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}(F') \text{ のとき} \\ \Delta^p \sigma(A_{\alpha}^{\#}) & ; \text{otherwise} \end{cases}$$

と定義すれば

$$(5.6) \quad \tau(A_{\alpha}^{\#}) = \begin{cases} B_{\alpha_1}^{\#} & ; \alpha = \xi \alpha_1 + \alpha_2, \alpha_1 \in \bar{\mathcal{P}}(\tilde{F}'), \alpha_2 \in \bar{\mathcal{P}}(F'), \xi \neq 0 \\ & \text{のとき} \\ B_0^{\#} & ; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}(F') \text{ のとき} \end{cases}$$

が成立する.

以上のことより次の定理を得る.

定理 II. (5.5) 式によって定義される  $\mathcal{O}(PG(k-1, \lambda))$  から  $\mathcal{O}(\lambda^{k-p} - F_r)$  への線型写像では (5.6) 式によって,  $\mathcal{O}(PG(k-1, \lambda))$  の  $\frac{\lambda^p - 1}{\lambda - 1} + 1$  個の idempotents  $A_{\alpha_2}^\#$ ;  $\alpha_2 \in \bar{P}(F')$  が  $\mathcal{O}(\lambda^{k-p} - F_r)$  の同一の idempotent  $B_0^\#$  に対応し,  $\lambda^p$  個の idempotents  $A_{\xi\alpha_1 + \alpha_2}^\#$ ;  $\alpha_1 \in \bar{P}(\hat{F}')$ ,  $\alpha_1$  個定,  $\xi \neq 0$ ,  $\alpha_2 \in \bar{P}(F')$ , が  $\mathcal{O}(\lambda^{k-p} - F_r)$  の同一の idempotent  $B_{\alpha_1}^\#$  に対応する.

## §6. Block design と Relationship algebra

$\lambda^k$  個の treatments  $\phi(\underline{a})$ ,  $\underline{a} \in EG(k, \lambda)$  のどの treatments を実施するかを指定するために用いた  $GF(\lambda)$  上の行列  $F(p \times k)$ , および実施した treatments  $\phi(\underline{x})$ ,  $\underline{x} \in \mathcal{F}_f^{k-p}$ , をどのように blocks に配置するかの仕方を指定するために  $r$  個の  $GF(\lambda)$  上の  $l \times k$  行列  $B_i$ ;  $i = 1, \dots, r$  を導入する. ここに  $F, B_i$ ;  $i = 1, \dots, r$  は次の条件をみたすものとする.

$$(6.1) \quad r(F'; B_1'; \dots; B_r') = p + rl \leq k$$

$EG(k, \lambda)$  上の  $k - p - l$  次元超平面:

$$(6.2) \quad \mathcal{B}_{i\underline{u}} = \{ \underline{x} \mid F\underline{x} = \underline{f}, B_i \underline{x} = \underline{u} \}, \quad \underline{u} \in EG(l, \lambda)$$

を考える. 明らかに  $\mathcal{B}_{i\underline{u}}$  の点の個数  $k$  は

$$k = \lambda^{k-p-l}$$

である.

$\mathcal{B}_{i\underline{u}} \ni \underline{x}$  に対応する treatments  $\phi(\underline{x})$  によって block  $\phi(\mathcal{B}_{i\underline{u}})$

$$(6.3) \quad \phi(\mathcal{B}_{i\underline{u}}) = \{ \phi(\underline{x}) \mid \underline{x} \in \mathcal{B}_{i\underline{u}} \}$$

を構成する.

このように  $v = \lambda^{k-p}$  個の *treatments* を  $r\lambda^l$  個の *blocks*  $\phi(B_{iu})$ ,  $i = 1, \dots, r$ ,  $u \in EG(l, \lambda)$  に配置するときの *design* の *incidence matrix* を  $N$  で表わす. すなわち

$$(6.4) \quad N = \|n_{\underline{x}, i\underline{u}}\| \quad (\lambda^{k-p} \times r\lambda^l)$$

である. ここに

$$n_{\underline{x}, i\underline{u}} = \begin{cases} 1 & ; \underline{x} \in B_{i\underline{u}} \text{ のとき} \\ 0 & ; \text{otherwise} \end{cases}$$

とする.  $N$  は  $v \times \theta$  行列 ( $v = \lambda^{k-p}$ ,  $\theta = r\lambda^l$ ) であつて, *block* の大きさ, および反復数はそれぞれ  $k = \lambda^{k-p-l}$ ,  $r$  であることがわかる.

いま  $B_{i\underline{\alpha}} = 0$ ,  $\underline{\alpha} \in \mathcal{P}^{k-1-p}$  をみたす  $i$  を  $i = i_1, \dots, i_{\lambda_{\underline{\alpha}}}$  とし,  $i \neq i_1, \dots, i_{\lambda_{\underline{\alpha}}}$  に対しては  $B_{i\underline{\alpha}} \neq 0$  とする.  $\lambda_{\underline{\alpha}}$  は明らかに  $\underline{\alpha}$  だけに関係する. すなわち互に  $\underline{\alpha}$ -th associate である 2 つの *treatments*  $\phi(\underline{x})$ ,  $\phi(\underline{y})$  の会合数は  $\lambda_{\underline{\alpha}}$  であることが容易にわかるが, 会合数  $\lambda_{\underline{\alpha}}$  は互に  $\underline{\alpha}$ -th associate である *treatments*  $\phi(\underline{x})$ ,  $\phi(\underline{y})$  の選び方に無関係である. よつてこの *design* は  $\lambda^{k-p}$ -fractional factorial association scheme を有する PBIB design (Partially balanced incomplete block design) である. したがつて, 行列  $N$  について次の関係式が成立する.

$$(6.5) \quad NN' = rB_0 + \sum_{\underline{\alpha} \in \mathcal{P}^{k-1-p}} \lambda_{\underline{\alpha}} B_{\underline{\alpha}}$$

また  $\mathcal{M}(\lambda^{k-p} - F_r)$  の互に直交する idempotents  $B_{\underline{\alpha}}^{\#}$ ;  $\underline{\alpha} \in \overline{\mathcal{P}}(\widehat{F})$  を用いて

$$(6.6) \quad NN' = \sum_{\underline{\alpha} \in \overline{\mathcal{P}}(\widehat{F})} \mu_{\underline{\alpha}} B_{\underline{\alpha}}^{\#}$$

と表わされる。ここに

$$(6.7) \quad \begin{cases} \mu_0 = rR = r + (\Delta - 1) \sum_{\beta \in \mathcal{P}^{k-1-P}} \lambda_\beta \\ \mu_\alpha = r + (\Delta - 1) \sum_{\substack{\beta: \alpha=0 \\ \beta \in \mathcal{P}^{k-1-P}}} \lambda_\beta - \sum_{\substack{\beta: \alpha \neq 0 \\ \beta \in \mathcal{P}^{k-1-P}}} \lambda_\beta ; \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}') \end{cases} \text{ のとき}$$

である。  $NN'$  が positive semi definite であることおよび (6.7) 式から既知の不等式:

$$(6.8) \quad 0 \leq \mu_\alpha \leq rR ; \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}')$$

が成立する。(6.7) 式よりまた

$$(6.9) \quad \mu_\alpha = \Delta \sum_{\substack{\beta: \alpha=0 \\ \beta \in \mathcal{P}^{k-1-P}}} \lambda_\beta - r \frac{R-\Delta}{\Delta-1} ; \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}')$$

と書くことができる。  $B_\alpha^\# ; \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}')$  に対応する treatment contrast の confounding coefficient  $c_\alpha$  は

$$(6.10) \quad c_\alpha = \frac{1}{rR} \mu_\alpha ; \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}')$$

である[5].

$n (= rv = bR = r\Delta^{k-P})$  個の plots に適当に番号をつけて次の incidence matrices を定義する.

$$(a) \text{ treatment : } \Phi_T = \|\varphi_{fx}^T\| (n \times v)$$

$$(b) \text{ block : } \Phi_B = \|\varphi_{f,u}^B\| (n \times b)$$

ここに

$$\varphi_{fx}^T = \begin{cases} 1 ; \text{ plots } f \text{ に treatment } \phi(x) \text{ が施されるとき} \\ 0 ; \text{ otherwise} \end{cases}$$

$$\varphi_{f, iu}^B = \begin{cases} 1; & \text{plot } f \text{ が block } \phi(B_{iu}) \text{ に含まれるとき} \\ 0; & \text{otherwise} \end{cases}$$

とする. そのとき design の incidence matrix  $N$  について,  $N = \Phi_T' \Phi_B$  が成立する. Treatments  $\phi(\underline{x})$ ;  $\underline{x} \in \mathcal{F}_+^{k-p}$  の間に定義された association scheme の行列表現としての association matrices を導入したと同いように, plots の間の relationship の行列表現とみなされる relationship matrices を定義する[2].

(c) identity:  $I_n$  (d) universal:  $G_n$  (e) block:  $V = \Phi_B \Phi_B' = \|b_{fg}\|$

(f) treatments:  $T_\alpha = \Phi_T B_\alpha \Phi_T' = \|t_{fg}^\alpha\|$ ;  $\alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p}$

ここに

$$b_{fg} = \begin{cases} 1; & \text{plots } f \text{ と } g \text{ が同じ block に含まれるとき} \\ 0; & \text{otherwise} \end{cases}$$

$$t_{fg}^\alpha = \begin{cases} 1; & \text{plots } f \text{ と } g \text{ が互に } \alpha\text{-th associate である treatment を受} \\ & \text{けるとき} \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases}$$

である. Treatment relationship matrices  $T_\alpha$ ;  $\alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p}$  のかわりに  $\mathcal{O}(\mathcal{A}^{k-p} - F_T)$  の互に直交する principal idempotents  $B_\alpha^\#$ ;  $\alpha \in \bar{\mathcal{P}}(\tilde{F}')$  に対応する matrices

$$(6.11) \quad T_\alpha^\# = \Phi_T B_\alpha^\# \Phi_T'; \quad \alpha \in \bar{\mathcal{P}}(\tilde{F}')$$

を定義すると便利である.

Relationship matrices  $I_n, G_n, V, T_\alpha$ ;  $\alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p}$  を生成元とする実数体上の algebra:

$$\mathcal{R} = \{ I_n, G_n, V, T_\alpha; \alpha \in \bar{\mathcal{P}}^{k-1-p} \}$$

は我々の PBIB design の relationship algebra とよばれている [2].

$\mathcal{R}$  は対称行列によって生成される algebra であるから, Completely reducible である. したがって  $\mathcal{R}$  は既約な両側 ideals の直和として表わされる. この既約成分の種類は  $NN'$  の固有値  $\mu_\alpha$  の値に応じて 3通りの場合, すなわち  $\mu_\alpha = 0$ ,  $0 < \mu_\alpha < rk$ ,  $\mu_\alpha = rk$  に分類されることは既知であるから結果のみを記すことにする [5].

Case 1.  $\mu_\alpha = 0$  のときは  $\frac{1}{r} T_\alpha^\#$  は  $\mathcal{R}$  の 1次元の両側 ideal の principal idempotent で,  $B_\alpha^\#$  に対応する treatment contrast は block に orthogonal である.

Case 2.  $0 < \mu_\alpha < rk$  のときは  $[T_\alpha^\#, VT_\alpha^\#, T_\alpha^\#V, VT_\alpha^\#V]$  は  $\mathcal{R}$  の 4次元の両側 ideal であつて, Complete  $2 \times 2$  matrix algebra に同型である. その principal idempotent は

$$(6.12) \quad E_\alpha^{\#(2)} = \frac{1}{rk - \mu_\alpha} (rk T_\alpha^\# - VT_\alpha^\# - T_\alpha^\#V + \frac{r}{\mu_\alpha} VT_\alpha^\#V)$$

である. またこのとき  $B_\alpha^\#$  に対応する treatment contrast は block に partially Confounded であり, その confounding coefficient は  $C_\alpha$  である. 更に block effect を消した  $B_\alpha^\#$  に対応する treatment contrast を与える idempotent は

$$(6.13) \quad F_\alpha^\# = \frac{rk}{rk - \mu_\alpha} (I_n - \frac{1}{rk} V) T_\alpha^\# (I_n - \frac{1}{rk} V)$$

である. また treatments を無視した block contrast を与える idempotent は

$$(6.14) \quad H_\alpha^\# = \frac{1}{rk \mu_\alpha} V T_\alpha^\# V$$

である.

Case 3.  $\mu_\alpha = rK$  のとき,  $\frac{1}{r}T_\alpha^\#$  は  $\mathcal{R}$  の 1 次元の両側 ideal の principal idempotent で  $B_\alpha^\#$  に対応する treatment contrast は block に totally confounded である.

以上のことより我々は既約成分の分類をするために次の Lemma は有用である.

Lemma 4.  $\mu_\alpha; \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F})$  について次の同値関係が成立する.

- (i)  $\mu_\alpha = 0 \iff \alpha \notin \mathcal{P}(B_i); i = 1, 2, \dots, r$
- (ii)  $0 < \mu_\alpha < rK \iff \alpha \in \mathcal{P}(B_i)$  とする  $B_i$  がある. 但し  $r \geq 2$  のとき
- (iii)  $\mu_\alpha = rK \iff \alpha \in \mathcal{P}(B_1)$ , 但し,  $r = 1$  のとき

したがって  $r = 1$  の場合は partially confounded part が存在しない. また  $r \geq 2$  の場合には totally confounded part が存在しないことがわかる.  $k = p + rl$  のときは orthogonal part が存在しない. (ii) の場合はさらに  $\mu_\alpha = K$  であることがわかる.

証明 (6.9) 式からわかるように  $\sum_{\substack{\beta' \alpha = 0 \\ \beta \in \mathcal{P}^{k-1-p}}} \lambda_\beta$  の値をしらべればよい.  $\lambda_\beta$  の定義から

$$(6.15) \quad (\lambda - 1) \sum_{\substack{\beta' \alpha = 0 \\ \beta \in \mathcal{P}^{k-1-p}}} \lambda_\beta = \sum_{i=1}^r \sum_{u \in EG(l, \lambda)} n_{x, iu} \sum_{\substack{p \in GF(\lambda) \\ p \neq 0}} \sum_{\substack{\beta' \alpha = 0 \\ \beta \in \mathcal{P}^{k-1-p}}} n_{x+ p\beta, iu}$$

である. (6.15) 式の右辺において  $n_{x, iu} = 1$  のところのみをしらべればよい. このとき  $B_i x = u$  であるから

$$(6.16) \quad \sum_{\substack{\beta' \alpha = 0 \\ \beta \in \mathcal{P}^{k-1-p}}} n_{x+ p\beta, iu} = \begin{cases} \frac{\lambda^{k-p-l}-1}{\lambda-1} & ; \alpha \in \mathcal{P}(B_i) \text{ のとき} \\ \frac{\lambda^{k-p-l-1}-1}{\lambda-1} & ; \alpha \notin \mathcal{P}(B_i) \text{ のとき} \end{cases}$$

が成立する。したがって (6.15), (6.16) 式から

$$(6.17) \quad (\lambda-1) \sum_{\substack{\beta \geq 0 \\ \beta \in \mathcal{P}^{k-1-p}}} \lambda_{\beta} = \begin{cases} r(\lambda^{k-p-\ell-1}-1) ; \alpha \notin \mathcal{P}(B_i') : i=1, \dots, r \text{ のとき} \\ r(\lambda^{k-p-\ell-1}-1) + \lambda^{k-p-\ell-1}(\lambda-1) ; \alpha \in \mathcal{P}(B_i') \text{ となる } i \text{ があ} \\ \text{るとき} \end{cases}$$

であることがわかる。(6.9), (6.17) 式から Lemma 4. が成立することがわかる。

また Lemma 4. の (i) を使うことにより

$$\delta - \nu + \sum_{\substack{\alpha \notin \mathcal{P}(B_i'), i=1, \dots, r \\ \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}')}} \gamma_{\alpha} = r-1 ; \quad r(B_{\alpha}^{\#}) = \gamma_{\alpha}$$

であるから, 一般化された Fisher の不等式

$$(6.18) \quad \delta \geq \nu - \sum_{\substack{\alpha \notin \mathcal{P}(B_i'), i=1, \dots, r \\ \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}')}} \gamma_{\alpha}$$

が成立する。等号が成立するのは  $r=1$  の場合に限る。

以上のことより relationship に対応する  $n$  の単位元  $I_n$  の分解が次の様に一意的に表わされる [5].

$r=1$  の場合:

$$(6.19) \quad I_n = \frac{1}{n} G_n + \sum_{\substack{\alpha \notin \mathcal{P}(B_1') \\ \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}')}} T_{\alpha}^{\#} + \sum_{\alpha \in \mathcal{P}(B_1')} T_{\alpha}^{\#}$$

である。

$r \geq 2$  の場合:

$$(6.20) \quad I_n = \frac{1}{n} G_n + E_B + E_e + \frac{1}{r} \sum_{\substack{\alpha \notin \mathcal{P}(B_i') \\ i=1, \dots, r, \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F}')}} T_{\alpha}^{\#} + \sum_{i=1}^r \sum_{\alpha \in \mathcal{P}(B_i')} E_{\alpha}^{\#(2)}$$



ここに

$$(6.21) \quad \begin{cases} E_B = \frac{1}{k} V - \frac{1}{n} G_n - \sum_{i=1}^r \sum_{\alpha \in \mathcal{P}(B'_i)} H_{\alpha}^{\#} \\ E_e = I_n - \frac{1}{k} V - \frac{1}{r} \sum_{\substack{\alpha \in \mathcal{P}(B'_i), i=1, \dots, r \\ \alpha \in \mathcal{P}(\tilde{F})}} T_{\alpha}^{\#} - \sum_{i=1}^r \sum_{\alpha \in \mathcal{P}(B'_i)} F_{\alpha}^{\#} \end{cases}$$

である。idempotents  $E_B$  および  $E_e$  の rank は

$$(6.22) \quad \begin{cases} r(E_B) = r-1 > 0 \\ r(E_e) = (r-1) \Delta^{k-p} - r \Delta^l + 1 > 0 \end{cases}$$

で与えられる。  $E_{\alpha}^{\#(2)}$  の 1 次元への分解は一意的ではないが block に直交する部分と含まれる部分に

$$E_{\alpha}^{\#(2)} = F_{\alpha}^{\#} + H_{\alpha}^{\#} ; \alpha \in \mathcal{P}(B'_i), i=1, \dots, r \ (r \geq 2)$$

分解される。

### §7. aliases pattern と pseudo-block idempotents

(3.1) 式を規定する行列  $F'$  の列ベクトルの生成する  $\overline{PG}(k-1, \Delta)$  の  $p-1$  次元部分空間を便宜的に

$$(7.1) \quad \mathcal{P}_0(F') = \overline{\mathcal{P}}(F')$$

で表わすことにする。  $\overline{PG}(k-1, \Delta) \ni \alpha, \beta$  に対して、もし  $\alpha - \beta \in \mathcal{P}_0(F')$  のとき、  $\alpha$  と  $\beta$  とは同値であるといって、  $\alpha \equiv \beta \pmod{\mathcal{P}_0(F')}$  と書くことにする。明らかにこの関係は同値律をみたす。  $\overline{PG}(k-1, \Delta)$  をこの同値関係によって互に同値であるものからなる類：

$$(7.2) \quad \overline{PG}(k-1, \Delta) / \mathcal{P}_0(F') = \{ \mathcal{P}_{\alpha}(F') \mid \alpha \in \tilde{\mathcal{P}}(\tilde{F}') \}$$

に分割する. ここに  $\mathcal{P}_\alpha(F') = \{\beta \mid \beta \equiv \alpha \pmod{\mathcal{P}_0(F')}\}$  とする.

$\overline{PG}(k-1, \delta) \ni \alpha, \beta$  に対応する idempotents  $A_\alpha^\#, A_\beta^\#$  が, もし  $\alpha \equiv \beta \pmod{\mathcal{P}_0(F')}$  であるとき, 互に別名 (alias) [1] であると定義する. この別名関係を  $A_\alpha^\# \sim A_\beta^\# \pmod{\mathcal{P}_0(F')}$  で表わす.  $\overline{PG}(k-1, \delta) \ni \alpha$  に対応する idempotents  $A_\alpha^\#$  の全体の集合:

$$(7.3) \quad A^\#(\overline{PG}(k-1, \delta)) = \{A_\alpha^\# \mid \alpha \in \overline{PG}(k-1, \delta)\}$$

をこの別名関係にある idempotents よりなる類:

$$(7.4) \quad A^\#(\mathcal{P}_\beta(F')) = \{A_\alpha^\# \mid \alpha \in \mathcal{P}_\beta(F')\}; \beta \in \tilde{\mathcal{P}}(F')$$

に分割される. すなわち

$$(7.5) \quad A^\#(\overline{PG}(k-1, \delta)) = \bigcup_{\beta \in \tilde{\mathcal{P}}(F')} A^\#(\mathcal{P}_\beta(F'))$$

である. (7.5) 式を (3.1) 式によつて決定される  $A^\#(\overline{PG}(k-1, \delta))$  の

aliases pattern ということにする.

定理 II から互に別名関係にある idempotents は (5.5) 式によつて定義される線型写像  $\tau$  によつて  $\mathcal{O}(\delta^{k-1} - F_r)$  の同一の idempotent に対応する.

§6 で実施した treatments をどのように blocks に配置するかの仕方を指定するために用いた  $r$  個の  $\ell \times k$  行列  $B_i; i=1, \dots, r$  に対して,

$\mathcal{P}(F'; B_i) \ni \alpha$  に対応する idempotents  $A_\alpha^\#$  の集合:

$$(7.6) \quad A^\#(\mathcal{P}(F'; B_i)) = \{A_\alpha^\# \mid \alpha \in \mathcal{P}(F'; B_i)\}$$

の元を (6.3) 式で定義した blocks の族  $\phi(\mathcal{B}_{i_u}); u \in EG(\ell, \delta) (i: \text{固定})$  に付随した pseudo-block idempotents ということにする.

(5.6) 式から

$$T(A^*(\bar{\sigma}(F); B_i)) = \{ B_{\alpha}^* \mid \alpha \in \bar{\sigma}(B_i) \}$$

であることがわかる。§6. から  $r=1$  の場合は, *pseudo-block idempotent* に対応する *treatments contrast* は *block* に *totally confounded* であり,  $r \geq 2$  の場合は  $B_{\alpha}^*$  に対応する *treatment contrast* を除いて *partially confounded* で, その *confounding coefficient* は  $\frac{1}{r}$  であることがわかる。また *pseudo-block idempotent* ではない *idempotents*  $A_{\alpha}^*$  に対応する *treatment contrast* は *block* に *orthogonal* である。

最後に, 広島大学理学部教授 山本 純恭 先生よりいただいた詳しい御批判にたいして深く感謝します。

### 参 考 文 献

- [1] Box, G.E.P. and Hunter, J.S. (1961) The  $2^{k-p}$ -fractional factorial designs. Part I and II, *Technometrics* Vol. 3, No. 3, 311-351. Vol. 3, No. 4, 449-458.
- [2] Ogawa, J. (1959) The theory of the association algebra and the relationship algebra of a partially balanced incomplete block design. *Inst. Statist. mimeo. Ser. 224* Chapel Hill, N.C.
- [3] Weyl, H. (1939) The classical groups their invariants and representations. Lond. Princeton Univ. Pres.
- [4] Yamamoto, S. (1964) Some aspects for the composition of relationship algebras of experimental designs. *J. Sci. Hiroshima Univ. Ser. A-I*, 28, 167-197.

- [5] Yamamoto, S. and Fujii, Y. (1963) Analysis of partially balanced incomplete block designs. J. Sci. Hiroshima Univ. Ser. A-I, 27, 119-135.
- [6] Yamamoto, S., Fujii, Y. and Hamada, N. (1965) Composition of some series of association algebras. J. Sci. Hiroshima Univ. Ser. A-I, 29, 181-215.